

しも

やけ



豊田一秀

出に残るものがあることに気がついた。

しもやけのあの痛痒さ、それである。しもやけもあかぎれも寒さのせいで起こる一つの症状であるが、しもやけが痛みだけではなく、痒みをも持ち合わせていたおかげで思い出の棚の中であかぎれよりも良い場所にいられるような気がする。

先日、悪友共と呑みながら、視、聴、触、嗅、味のいわゆる五感の中で何が一番思い出に強く訴えるかという話になった。脱脂粉乳こそが我が小学生時代の味だとか、ヒーターの入った山の手線のおいこそが東京の冬のおいだとか話しているうちに、アルコールのせいとか、あの映画音楽こそ我が悲恋の曲だ等とぐちる奴も出てきたりで楽しいひとときであった。しかし今回、しもやけについて考えながら、フッと五感以外にも強く思い

私のもやけの思い出は、小学生時代が中心である。授業中、赤くむくんだような足の小指が無性に痒くなってきて、片方の足でふんずけているのだが、そのうちどうにも我慢ができなくなってきた靴下も脱いでポリポリかいていると先生に見つかって大目玉をくらった事。休み時間にダルマストーブにあたっているうち、手の先がもうれつに痒くなってきてどこまでストーブに手を近づけられるかという競争をして、熱さに耐えつつも良い気持であった事。またしもやけと風呂とは切っても切れない関係で、私が熱い風呂を好むようになったのも、このしもやけが原因

しているに違いない。特に洗面器に両足を入れ、だんだん熱いお湯を入れていく時のあの快感と苦痛、一種の自虐感……。今思い出してもゾクゾクしてしまう。

痛さは少しでも避けたい感覚であるが、痒さは、それと一味異っている。「痒み」——しもやけのみならず、蚊にさされた時でも大抵はかかない方がよいと知りつつも、その誘惑に理性が負けてしまい、だめだ、だめだと言いつつもその刹那の快感に溺れてしまう、そして後に痛みと共に悔いを残す——こんな感覚である。その痒みと痛みが同居しているしもやけは、甘さと酸っぱさの同居している初恋とどこか似ている等と言ったら大勢の人々にあきれられてしまうだろうか。しもやけの方がはるかに即物的ではあるが、異ったものがお互いを明らかにしつつ同居している両者は、どちらもなつかしく心に残る存在である。

ところで最近東京では幼稚園でも、全くと言ってよいほど、なつかしいしもやけの手や足を見なくなってしまう。栄養がよくなってきたせいなのだろうか、セ

ントラルヒーティングのせいなのだろうか、それとも公害で東京が暖冬になってきているせいなのだろうか、はたまた子ども達が戸外で遊ばなくなっているせいなのだろうか。

垣根の垣根のまがり角

焚火だ、焚火だ、落ち葉焚き

あたろうか、あたろうよ

しもやけおててがもう痒い

(異聖歌—作詞 渡辺茂—作曲)

私の大好きなあの歌を、今の子ども達が一種の実感を持って歌えなくなってしまうのはなんともし寂しい。

「さて、明日あたり、子ども達を誘って押しくら饅頭でもしてやろうかな。」などとブツブツひとり言を言っている私である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)